

学会ニュース

目次

・ 第35回大会について	1
・ 共通論題趣旨説明：「18世紀の〈地下世界〉を掘る」	寺田元一 2
【エッセー】		
・ 女性と公共圏と国民アイデンティティと	大石和欣 3
・ イタリア発の電子ジャーナル	堀田誠三 5
・ 事務局より	6

第35回大会について

来年度の第35回大会は2013年6月22日（土）、23日（日）の両日、一橋大学で開かれる予定です。開催校責任者は小関武史会員です。

共通論題は「18世紀の〈地下世界〉を掘る」で、コーディネーターは寺田元一会員です。23日（日）を充てる予定です。（次ページの趣旨説明をご覧ください。）

詳しくは同封のプログラムをご覧ください。

多くの会員が大会に参加されるよう、お願いいたします。ご出欠は同封の葉書でお知らせください。5月24日（金）までに までご返送ください。

18世紀の〈地下世界〉を掘る

コーディネイター 寺田元一（名古屋市立大学）

総合的企図：19世紀以降のアカデミズムの発展によって覆い隠され、地下へと押し込められた18世紀の〈知〉や〈情〉の世界、あるいは元々18世紀において地下に押し込められていた〈知〉や〈情〉の世界を、考古学的に（？）発掘する。国ごと地域ごとに地下と地上を分かち線は、18世紀においても異なり、19世紀以降のアカデミズムの発展が新たに引き直した線も異なる。そうした差異を意識しながら、〈地下世界〉を発掘し明るみに出すことで、われわれの知る地上の〈知〉や〈情〉の世界を相対化し、複雑に文脈化された、より多元的な18世紀像に迫る。

18世紀フランスの地下文書については20世紀初頭から発掘が続けられ、現在では多数の写本がヨーロッパ各地で発見され、それが新たに校訂されてUniversitasなどから多数出版されている。日本でも赤木昭三氏の研究書が出され、また野沢協氏編訳の『啓蒙の地下文書』二巻などが出版されて、地下文書について多くの知見が得られている。

しかしながら、こうした地下文書発掘は、基本的には盛期「啓蒙」思想家の先駆者探しといった方向でなされ、地上の「啓蒙」思想を既定の事実にしてテキストの価値を測り、価値が高いとされるものが校訂され、それに著者名が付されて、それが新たに古典化（精製！）されている。それはそれで、確かに私たちの研究の視野を広げ、18世紀フランス思想をより広く深く研究することを助けたが、一方で〈地下世界〉そのものは十分明らかになっていない。この共通論題では、地下文書を初めとする〈地下世界〉のあり方そのものを、「啓蒙」の多元性に留意しつつできるだけ複合的に問いたい。以下は問題群の例。

従来のアカデミズムによって〈地上〉と〈地下〉という差別化がいかになされ、18世紀の知的生産物に〈古典〉と〈そうでないもの〉という区別がいかになされたか。

英墮仏日などの国々の時代的地域的文脈で、〈地上〉と〈地下〉という分節化がいかになされているか。その分節化に、宗教（教会）、政治（国家や公共圏（メディア・文化）など）、経済（同業組合的規制、市場経済など）、科学（アカデミーなど）などがいかに関わっているか。

そうした独自の文脈において分節化された〈地下〉が、〈地上〉とは異なるいかなる知のネットワーク構造を作り上げ、それがどのように機能したか。〈地上〉と〈地下〉の二重構造はどこでどう切り結び、またどこでどう連携したか。フランスの公共圏で18世紀後半に生み出された「哲学書」（ダントンのような文書をどう捉えるか。それは地上文書か地下文書か。〈地上〉と〈地下〉の闘争や連携は各地域でいかになされたか。

18世紀の〈地下〉の知はいかなる特性を有したか。18世紀フランスについては、現代のインターネットを思わせるような、その知の匿名性やコピペ的編集性が話題になるが、そうした特性は他の地域でも見出されるか。それは著作権や独創性を重視する、知の近代の見方との関係でいかなる意味を持つか。その方向から、本来〈地上〉の知の集大成と言えるような『百科全書』や大事典の知や雑誌や新聞の知をいかに捉えるか。それらがコピペ的編集によって作られたことは現在よく知られるところだが、そうした大事典の知がなぜ〈地下〉の知と相同的なのか。

以上は寺田の企図であり、実際の共通論題がそれを内破して展開することを期待する。

女性と公共圏と国民アイデンティティと

大石和欣（東京大学）

最近読んで刺激を受けた本にアンヌ＝マリ・ティエス『国民アイデンティティの創造』がある。¹ フランス語が不得手のわたしにとって邦訳はありがたい。18～19世紀にかけてヨーロッパで国民性や民族性、国家の概念、国の歴史や文化的伝統が人為的に「想像＝創造」されていくプロセスが網羅されている。ジェームズ・マクファーソンの『オシアン』詩群、ウォルター・スコットの歴史小説、グリム兄弟のドイツ語辞典など、文学的・文化的な「想像＝創造」物に感化され、あるいはそれらを媒介にして、ヨーロッパ各地で伝説や伝統文化の掘り起しがはじまり、「国語」および「国民アイデンティティ」が構築され、「国家」への帰属意識が高められていく。ベネディクト・アンダーソンの概念「想像の共同体」でもこの現象は説明できるが、政策や外交、革命、社会運動、芸術運動など実体として多様なかたちをとって現われてくる点で国民アイデンティティは「想像」の世界のなかで話が終わるわけではない。

この問題に関心をおぼえたのは、現在進めているジェンダーと公共圏に関する共同企画につながっているからである。ティエスの射程に女性や公共圏は入ってこないが、18世紀のイギリスにおいて両者の関係性を考えた場合に、「想像＝創造」された国家・国民（性）はどう絡んでくるのだろうかとふと答えに窮する疑問に気づかされたのである。

女性たちと国家の歴史とをどう結びつけていくべきかという問いかけは、実は14年前にジェイン・レンドールが提出したものだ。² 18世紀のイギリス女性たちにとって、抑圧的な父権社会のなかで選挙権もなく、経済的自立も難しいとすれば、国家や国民アイデンティティという概念はとほうもなく縁遠いものであったのであろうか。

ハバーマスの公共性の議論において、女性の存在が無視されてしまっている点は80年代からフェミニスト研究者たちから厳しい批判にさらされてきた。イギリスに話を限れば、家父長的社会のなかで女性たちが公職や政治権力、市民権からさえも疎外され、私的領域に押しこめられてきた傾向は強く、ハバーマスの想定した合理的なブルジョワ公共圏から排除されうることはたしかである。そのためキャロル・ペイトマンは公＝男性／私＝女性という対比を当然として、それを制度化した社会の問題を指摘したが、ジョン・B・ランディーズやナンシー・フレイザーのように、ハバーマスが男性による抽象的・合理的な言説のみを公論として理想化している点を批判するほうが妥当であろう。³ また、レオノア・ダヴィドフとキャサリン・ホルの「分離領域」論は、女性たちが男性的な世界とは異なる空間で生活していることを認めつつも、彼女たちが公論形成の過程で多様なかたちで関与していることを示した。⁴

実際に18世紀のイギリスにおいて公職にもついてないし、政治的公共圏から隔離されていたはずの女性たちも、小説や詩などに手を染めて文壇に登場しだしていたし、そうでなくても社交やサロン、あるいはチャリティ活動を通して女性たちはいわゆる私的領域たる家庭の枠を超えた市民社会のなかで行動していた。ペイトマンのように男性／女性と公／私の対照を同質にとらえるのは不適切である。むしろ多義的かつ多元的な「公」(public)と「私」(private)のあり方を前提として、それぞれの女性にとっての公共圏がどのようなものであり、どう関与していったかを探究しているのが、この20年ほどの英語圏における研究動向である。

そういうなかで女性と国民アイデンティティとの関係については、意外なほど突きつめた考察がなされていない。フランス革命期以降のイギリスにおいて女性たちの大半が愛国主義を標榜したとするリンダ・コリーの説が支配的なのも一因かもしれない。⁵ 革命期に渡仏し、英仏の公共圏をまたにか

けたヘレン・マライア・ウィリアムズのようなケースは稀にしても、愛国主義だけがこの時代の女性たちが公共圏を通して築いたアイデンティティでもなからう。⁶ フランシス・バーニーやマライア・エッジワースのように、自国を愛することと他国を愛することに矛盾を認めないパトリオティズムを小説内に持ちこむことで、ナショナリズム言説を脱構築していく女性作家たちもいた。⁷ 啓蒙主義的コスモポリタニズム思想の系譜を受け継ぎながらも、男性とは異なる公共圏において国家や国民という枠組みを捉え直し、再構築しようと試みているのである。たしかにハバーマスの議論において国家行政やナショナリティは公共圏の埒外であり、批判対象でさえあるが、そこから排除されているはずの女性たちがどのような概念として国家やナショナリティを築こうとしていたのかを考えることは、とりわけグローバル化した現代社会において切実な問題意識だと思う。

市場経済や消費という視点を設定することで、新しい捉え方もできよう。ハバーマスは「商品取引が家族経済の境界をつきやぶって出て行く」と私的領域と公共圏の交錯を指摘したが、⁸ 18世紀のイギリス女性たちはインド産キャリコ、インド・中国産紅茶、西インド産砂糖、中国製陶器など奢侈品を消費した際に、不可避免的に植民地とのつながりを意識せざるをえなかったはずである。砂糖に関していえば、奴隷貿易・奴隷制と密接に結びついていることは自明であり、だからこそ世紀末から展開する奴隷貿易廃止運動において女性運動家たちは砂糖不買運動を起こしたのである。それは家政と国家経済とを直結させる大胆な試みであった。女性詩人たちが反奴隷貿易詩を次々に公共圏に送り出し、公論形成に関与したとき、国政や経済はもちろん、異文化としての黒人たちの民族性や宗教性といった問題も必然的に議論のなかに組み込まれていく。⁸ 日常生活の経済活動を通して女性たちは公共圏と接続し、同時にアイデンティティの再構築を目指していたと言えそうである。

公共圏については、国内でも安藤隆穂や大野誠により優れた研究が重ねられているが、国家、国民性、政治・経済が変容する18世紀ヨーロッパ諸地域において女性の公共圏をどうとらえるべきかはわたし自身がまだ不勉強なため覚束ない。18世紀学会を通して折々に情報交換や研究協力の可能性を探ることができればとひそかに願っている。

注

¹ アンヌ＝マリ・ティエス『国民アイデンティティの創造 — 十八～十九世紀のヨーロッパ』斎藤かぐみ訳（勁草書房、2013年）。

² Jane Rendall, 'Women and the Public Sphere,' *Gender & History*, vol.11. no.3 (1999): pp.482.

³ Carol Pateman, *The Disorder of Women: Democracy, Feminism and Political Theory* (Cambridge: Polity, 1989), pp.118-40; Joan B. Landes, *Women and the Public Sphere in the Age of the French Revolution* (Ithaca: Cornell UP, 1988); ナンシー・フレイザー「公共圏の再考：既存の民主主義の批判のために」、クレイグ・キャルホーン『ハーバマスと公共圏』山本啓・新田滋訳（未来社、1999年）117-59頁。

⁴ Leonore Davidoff and Catherine Hall, *Family Fortunes: Men and Women of the English Middle Class, 1780-1850* (Chicago: U of Chicago P, 1987).

⁵ リンダ・コリー『イギリス国民の誕生』（名古屋大学出版会、2000年）第6章。

⁶ 拙論「境界線上のルポルタージュ—フランスからのイギリス人女性の手紙」、見市雅俊編『近代イギリスを読む—文学の語りと歴史の語り』（法政大学出版局、2011年）151-91頁。

⁷ 吉野由利「女性の越境と『文芸共和国』—ナショナル・アイデンティティの構築と『公共圏』の可能性」、平成19～21年度科研費基盤（B）成果報告論集「18世紀イギリスにおける女性の言説と公共圏—文学研究と歴史研究の断層と結節」（研究代表者 富山太佳夫）（2010年）55-68頁。

⁸ ユルゲン・ハバーマス『公共性の構造転換』細谷貞雄・山田正行訳、第2版（未来社、1994年）48頁。

⁹ 拙論「『共感の疼き』—女性詩人たちとそれぞれの奴隷貿易廃止運動」、新見肇子・鈴木雅之編『揺るぎなき信念—イギリス・ロマン主義論集』（彩流社、2012年）29-45頁。

¹⁰ 安藤隆穂編『フランス革命と公共性』（名古屋大学出版会、2003年）；安藤隆穂『フランス自由主義の

成立—公共圏の思想史』（名古屋大学出版会、2007年）；大野誠編『近代イギリスと公共圏』（昭和堂、2009年）。20世紀になるが、イギリス女性と公的領域の関係についての優れた研究としては、奥田伸子「女性・公的領域・公共圏—第二次世界大戦期における同一補償要求運動と女性議員」、大野編『近代イギリスと公共圏』161-88頁。

イタリア発の電子ジャーナル

堀田誠三（福山市立大学）

話は旧聞に属しますが、トリノ大学を拠点に電子ジャーナル Journal of Interdisciplinary History of Ideas が、2012年7月に創刊されました (<http://www.ojs.unito.it/index.php/jihi/index>)。12月には第2号もでました。現在、次号を編集
中とのことです。

創刊号の目次は、以下のようです。

A New Journal (M. Albertone – E. Pasini)

Une nouvelle revue (M. Albertone – E. Pasini)

論文

Open Society or Closed Salon? A Reading of Brillat-Savarin’s “Physiologie du goût” (C. Hashimoto)

Interêt immédiat et vanité. Vers un individualisme responsable et organisateur (A. Tiran)

Skinner contra Skinner. Civic Discord and Republican Liberty in Machiavelli’s ‘Mature’ Texts (M. Suchowlansky)

その他

Of Engineers and Dragons. The JIHI Logo (E. Pasini)

Book Reviews (C. Carnino, R. Gronda, S. Mammola)

Activities of the GISI | Les activités du GISI

ご覧のように、イタリア発でありながら使用言語は英語とフランス語です。アルベルトーネ（トリノ大学歴史学教授、重農主義研究）とパシーニ（トリノ大学哲学准教授、ライプニッツ研究）は、共同で書いている巻頭の「創刊の辞」にあたる A New journal / Une nouvelle revue で、国際的な学術語として、過去のはフランス語、現在のは英語をとったとしています。ただし英文論文ではあっても、たとえば対象の文献がフランス語のばあい、原則的に引用は英訳ではなく直接フランス語でおこなわれます。このようなところで、イタリアでの学術論文の伝統が継承されています。

大学はいずれも同じ、いわゆる国際化の波にまきこまれており、トリノでもアルベルトーネ教授たちは、目次の最後にあるGISI（思想史学際グループ）を組織して打って出ようというのです。創刊準備の案内は、学際性を具体化するための対象領域として15世紀から19世紀前半までを想定するとのべています。A New journal / Une nouvelle revue では、スミスの例、あるいはデュポン・ド・ヌムールからセーの系譜に言及しつつ、焦点が18世紀にある、と明示されています。

アルベルトーネ教授は2009年9月に来日し、ここでお名前をあげることはいたしません、会員の方がたのご支援をえて、短期間のきつい日程のなか東京、京都、名古屋とあちこち見学しつつ講演会や研究会をこなしていきました。そのさいに日本の18世紀研究の水準の高さが強く印象に残ったようで、新雑誌を名実ともに国際的なものにするため、論文の投稿を中心に日本からの寄稿を要請してい

ます。橋本周子会員の論稿が論文の最初に掲載されているのは、その期待にこたえたものといえます。

しかし投稿はあるけれども、雑誌の性格にふさわしく学問的水準を維持するにたる論文を見つけるのが困難、という編集にまつわる悩みをトリノでもかかえているようです。

そこで会員の皆さんにお願いです。まずはサイトをのぞいて「味見」してください。お気に召しましたら、どうか投稿などもなさってくださいますように。



事務局より

事務局の移転について

今年6月の大会をもって代表幹事が交代し、それにともない事務局も移転する予定です。詳細は追ってお知らせします。

日本18世紀学会会員名簿について

2013年版会員名簿ができあがりしましたので同封いたします。できるだけ注意を払って作成しましたが、訂正等がありましたら事務局までお知らせください。

事務局の連絡先（今年6月まで）は以下の通りです。

- E-mail : jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp
- 郵便： 〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学文学部 増田（仏文）研究室
- Tel. / Fax : 075-753-2766

『年報』への論文投稿について

すでにご存じと思いますが、数年前から、大会での発表をもとにした論文以外の論文も投稿できるようになりました。詳しくは『年報』末尾の投稿規程をご覧ください。

国際18世紀学会の名簿について

すでにお知らせしたように、国際18世紀学会のサイトがヴォルテール財団からラヴアル大学に移り、名簿もそのサイト上で公開されています。（<http://www.isecs.org> → ISECS-direct ; フランス語版では Répertoire という項目です。そこから人名や国名に従って探せます。）

個人情報も公開されているので、訂正の必要がある場合、あるいは個人情報の公開を望まない場合は、ご自分で訂正していただくか、管理責任者 (Pascal Bastien, admin@isecs.org) に連絡してください。

(英語でもフランス語でも通じます。名簿ページ上端のContactボタンからも同じアドレスにつながります。どうしてもわからない場合は事務局にお知らせください。)

国際学会事務局からの希望として、連絡などの便宜を図るため、メールアドレスを持っている会員は自分のメールアドレスを連絡してください。その際、メールアドレスの公開の是非、またメールアドレスを用いて連絡を受けるか否かは、個人の選択にまかされています。

シンポジウム、講演会や出版の告知などのためにも、国際18世紀学会のホームページを活用してください。

※ 新入会員の方については、日本18世紀学会事務局から国際18世紀学会のサイト管理責任者にお名
前だけ知らせてあります。そのような事情で、お名前はすでに記載されているはずで、なるべく自分

で上記アドレスにアクセスして、公表したいデータを登録してください。詳しくは国際18世紀学会のサイトをご覧ください。（上記サイトの画面上部のISECS-directまたはRépertoireボタンから名簿にアクセスできます。）

※※名簿データ変更の必要がなくても、国際学会のサイトをご覧ください。国際学会に関する情報のほか、シンポジウムなど各種の情報が掲載されています。

投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局まで。

なお、以前の「『百科全書』研究会」のように、チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しませんが、全会員にお届けできます。（経費等の都合上、枚数の少ないものに限りま。

共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。（特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないというご不満をお持ちの方は積極的にご推薦ください。）

学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、4月号は2月初めまでに、9月号は7月半ば頃までに、12月号は10月半ばまでにご希望をお寄せください。）

年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾またはホームページの「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、会費未納の方には、その年数に応じた金額を印字した払い込み用紙を同封させていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。

なお、口座番号は以下の通りです。

00950-2-178903 名義：日本18世紀学会

寄付のお願い

この「学会ニュース」最終ページの要領をご覧ください。

寄付のお礼

前号以来、以下の方々から寄付がありました。お礼申し上げます。（払い込み順、敬称略）
匿名希望 10口 10,000円

学会への献本

学会宛に以下の図書をいただきました。お礼申し上げます。

- ・ジャック・P・グリーン『幸福の追求 イギリス領植民地期アメリカの社会史』大森雄太郎訳、慶應義塾大学出版会、2013、xiii+296+64 p.

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしくお願いたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお、現在事務局からメールをお送りしてもお届けできない会員の方がいらっしゃいます。ご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順)：安西信一、伊東貴之(東アジア交流担当)、王寺賢太(国際幹事)、小田部胤久(国際学会執行委員)、川島慶子、斉藤涉、関谷一彦(年報担当)、武田将明、田邊玲子(年報担当)、寺田元一、長尾伸一(東アジア交流担当)、馬場朗、逸見龍生、堀田誠三、増田真(代表幹事)、

会計監査：玉田敦子 中島ひかる

日本18世紀学会ニュース 第72号 2013年4月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 増田 真

事務局 〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 増田(仏文)研究室

e-mail: jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp

tel. / fax: 075-753-2766

<http://www.gakkai.ac/jsecs/>